

## 安政版『素問』の影響

吉岡 広記

日本鍼灸研究会

【緒言】本学会第115回学術大会において、『素問』の日本安政四年重刊本（以下、安政版と略す）の刊行意図は、江戸前期以来の通行本であった寛文三年刊本（以下、寛文本と略す）に替わる最善のテキストを広く流布させることにあったと結論づけた。引き続き本書の影響について報告する。

【方法】調査対象は、安政版刊行後に著された注解書の森立之『素問攷注』（以下、攷注と略す）・山田業広『素問次注集疏』（以下、集疏と略す）・伊沢堂軒『素問積義』（以下、積義と略す）とした。安政版の影響を測るうえで指標となるのは、渋江抽斎所蔵の顧從徳本覆刻に際して行われた①附訓・②字句の改変・③室町古鈔本と元槧本との異同を示した仿宋槧本素問校譌（以下、校譌と略す）の附刻のうち、②と③である。

【②字句の改変】改変箇所（経文22，王冰注159，新校正注54，音釈8，刻工名26。日本鍼灸史学会第18～20回学術大会にて報告）を比較した結果、安政版の影響はほぼないものと判断された。数例を挙げて論証する。

◆気穴論15-07b07「頂中央一穴」：安政版は「頂」を「項」に改める。攷注・集疏・積義は、安政版を用いれば「項」とするはずであるが、「頂」に作り、いずれも正すべきと注する。攷注は『太素』との校勘によるが、集疏と積義は根拠を示さない。校譌の「項，原誤頂」に拠った可能性もあるが、『類経』（これに拠る岡本一抱『諺解』）・呉註『素問』・『太素』や古林書堂本・呉梯本を直接的または間接的に確認していたと見るべきである（『註證発微』・寛文本・呉勉学本・周曰校本は「頂」に作る）。

◆気穴論15-10a02「外破大膈」：安政版は「膈」を「膈」に改める。攷注・集疏は「膈」に作り、注記なし（『類経』『諺解』は「膈」に作る）または多紀元簡『素問識』〔呉註『素問』〕に拠るか。積義は「膈」とし、「周本，膈作膈，非」と注しており、安政版を用いたとも考えられるが（底本は周曰校本）、『太素』（楊注は「膈」）に拠った可能性が高い。

◆微四失論王冰注23-09b09「用必乖哀」：安政版は「哀」を「衷」に改める。集疏は安政版に、積義は顧從徳本と同じ。周曰校本は「哀」、寛文三年本・呉勉学本は「衷」、古林書堂本・喜多村直寛『黄帝内経素問講義』は「衷」とし、「衷」とするのは安政版と集疏のみである。集疏は、安政版を校勘に用いていた可能性がある。

なお、安政版の明らかな誤刻（通評虚実論08-16b01「黄疽暴痛」：「疽」→「疔」。至真要大論篇22-03b04「上淫于下」：「于」→「干」。評熱病論王冰注09-10b02「循喉嚨」：「嚨」→「隴」など）は踏襲されていない。これは、安政版が底本に用いられていないことの証左となる。

【③仿宋槧本素問校譌】校譌は、字句の増減や内容の異なる箇所（経文97，注272）の指摘に主眼があると見られ、すべての校勘結果を記してはいない。森は安政版刊行に関わった一人であるが、攷注では『太素』を重視する著述方針により王冰注の引用は行われず、伊沢も諸家注を渉猟し適宜引用することから少ない。加えて、校勘は経文に重きを置くために、注には校譌の影響が見られない（経文に限り校譌の補足や指摘のない箇所を記す例あり）。山田は王冰注を中心に『素問』を読むという姿勢から、安政版を参照していた形跡があり、校譌の引用は、取捨選択があるものの経注を問わず多い。

【結語】安政版の影響は極めて限定的である。その理由は、『素問』の読み方にある。安政版は王冰注『素問』の最善のテキストを提示することのみが目的であったが、考證学的な立場からの注解となれば、最善に辿り着く過程を示す必要があり、また何を主にして読むかという問題も関わるため、従来の諸資料を差し置いて安政版を底本とすることは、初めからできなかったものと考えられる。